第１回古賀市環境審議会「生物多様性専門部会」　議事録

１　期日　　平成 30 年 5 月 7 日（月曜日）14 時 30 分から 15 時 50 分まで

２　場所　　古賀市役所　第 1 委員会室（第 1 庁舎 4 階）

３　出席委員（6 名）

部会長	薛　孝夫	部会員	崎村　泰道
部会員	柴田　幸次	部会員	中屋　允雄
部会員	水上　シゲ子	部会員	嶺井　久勝

４　欠席委員（1 名）

部会員　　鬼倉　徳雄

５　オブザーバー（2 名）

福岡県環境部自然環境課　課長　　岩崎　高行
（代理出席　福岡県環境部自然環境課　野生生物係長　　入江　美歌）
福岡県保健環境研究所環境生物課　課長　　須田　隆一

６　事務局出席者職氏名

市民部長	清水　万里子	環境課長	智原　英樹
環境整備係長	船津　真里子	業務主査	永延　祐介
主任主事	吉澤　祥子	主　　事	小濵　航

７　議題等

・生物多様性専門部会について
・生物多様性地域戦略について

８　配布資料

（事前配布）　次第
　　資料 1　　生物多様性専門部会について
（当日配布）　資料 2　　生物多様性地域戦略（案）について

概要

１．開会

２．市あいさつ

（市民部長）

本日はお忙しい中、古賀市環境審議会「生物多様性専門部会」にご出席いただき、誠にありがとうございます。

古賀市では、古賀市の生物多様性保全のため、平成 28 年度に古賀市生物調査検討委員会を設置いたしまして、委員の皆様からは、多くの専門的なご意見をいただいてまいりました。

皆様からのご意見やご提案を参考にさせていただき、今年度、環境課を事務局としまして、古賀市の生物多様性地域戦略を策定する予定としております。

本日は、戦略の重要な部分となります、「古賀の将来像と目標」につきまして、ご協議いただき、皆様の忌憚のない意見を聞かせて頂ければと思います。

環境審議会から引き続きご出席いただいている委員さん方におかれましては、長時間のご協議となりますが、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

簡単ではございますが、開会のあいさつとさせて頂きます。

３．議題

（１）生物多様性専門部会について

・【資料 1】に沿って、生物多様性専門部会の構成、古賀市の生物多様性地域戦略（イメージ・構成等）、今後のスケジュール（案）について事務局より説明。

・質疑・応答。

○ 部 会 長 ： 先ほどの古賀市環境審議会の冒頭に古賀市長から諮問いただき、生物多様性専門部会を設置し、生物多様性古賀戦略とでも言うべきものを今年度中に策定したいとのことだった。平成 28 年度に設置された古賀市生物調査検討委員会で生物多様性地域戦略についての検討を重ねてきており、そこでのご意見を踏まえて、事務局が大枠の案を作成している段階である。地域戦略の構成、計画期間、対象区域については、先ほどの審議会において事務局案のとおり承認されているが、今までのところで何かご質問やご意見はあるか。

【質疑・意見なし】

ご質問やご意見はないようなので、次の議事へ移らせていただく。

（２）生物多様性地域戦略について

・【資料 2】に沿って、生物多様性地域戦略（案）について、第 1 章、第 2 章について事務局より説明。

・質疑・応答。

○ 部 会 長 ： 資料 1・3 ページのスケジュール（案）では、専門部会の開催は第 2 回が 10 月、第 3 回 12 月に予定されている。将来像の決定は最後でもいいと考えられる方もおられるかもしれないが、事務局としては、本日は将来像を決めていただいていて 10 月の第 2 回専門部会までに、将来像をもとに第 3 章の施策を考えていくことを想定しているとのことである。将来像を先に決めておくことで、事務局の作業がしやすい部分もあるようなので、将来像やキャッチフレーズを、事務局の候補をもとに確定できればと思っている。

資料 2・8 ページの左側に将来像とキャッチフレーズの候補が記載されているが、このキャッチフレーズを戦略のタイトルとして使用し、それを実現していくためのアクションが資料 2・8 ページの右側に記載されていて、第 3 章につづいていくという流れだが、ご意見、質問があれば、ぜひお願いしたい。また、こういうことも盛り込むべきだというご意見が、それぞれの専門の立場であれば、それもお伺いして、反映させていきたい。

○ 部 会 員 ： 将来像の候補の中には、“人と生きもの”という言葉が出てくるが、事務局が考える“生きもの”とはどういうものか。

● 事 務 局 ： 移動をするような動物だけでなく、植物なども含めた“生きもの”をイメージしている。

○ 部 会 員 ： 専門的なことはわからないが、農業をしている立場から見ていると、動物の生態は以前と違ってきているように感じる。最近は、田んぼや畑にミミズがおらず、以前はよく見かけていたサルもほとんど見ることはなくなった。昔のような方法で農薬の使用はしていないし、有機を使っていこうとしているが、ミミズやメダカを見る機会は少なくなった。環境の違いかとも思うが、逆にイノシシはとても多く、農作物への被害も大きい。そういうイノシシなども含めた“生きもの”と共に生きていくという表現に、現場にいる身としては違和感がある。

○ 部 会 員 ： 今の意見と関連するが、森林保全の立場から言えば、いろんな動物が、害を与える“害獣”であるという考えが非常に強く、その害をどう防ぎ、なくしていくかという思いがある。ただ、“害獣”などと指定してしまうことからは、多様性を認めると気持ちは生まれてこないと思う。

少し話が大きくなるが、人間の体についてのテレビ放送があった。骨一つ見て、骨からいろんな指令が出て、その指令を各臓器が受けたり、あるいは反応したり、何一つとして無駄な要素はなく、人間の体の中は、いろんなところで非常に不思議な関連性を持っていて、それはすばらしいことだという内容だった。

キャッチフレーズについても、せっかくの機会なので、この場のいろんな知恵を、それこそ関連性をもってすれば、みんなが「なるほど、そうだな」と思い、何かに気づいて、それについて何かやってみよう、その自分の考えが他の人にも影響を与えていくような、より素晴らしく、みんなが納得するようなキャッチフレーズができるのではないか。

○ 部 会 長 ： キャッチフレーズに関しては、事務局も市民の心に訴えかけるキャッチフレーズを選びたいとのことだったが、今のご意見で、よりはっきりしてきた。
全体を通して、“生きもの”については、動物や植物含めて、人間を除く生物を“生きもの“と呼ぶということで統一しておいてよいだろう。「生きものとの共生」、「生きものと共に」という表現は、「人間を除く生物と人間との共生」、「人間を除く生物と人間とが共に」ということを意味しているのだろうから、その上で、“生きもの”には害獣も含むのではないか、害獣と共に生きるということは難しい場面もあるのではあるというご意見が出ており、「共生」、「共に生きる」という言葉だけを打ち出してよいのかという疑問も出ている。事務局としてはどう考えるか。

● 事 務 局 ： 先ほどのご意見のように、イノシシのように農作物などに被害を与えるような“生きもの”がいる中で、生物多様性の保全を進めていく際には、生態系のバランスは大切にしないといけないと考えている。生態系のバランスにも気を付けながら、私たちの暮らしに恵みに与えてくれるような生態系の豊かさが守らなければならないということを伝えられるような表現にしていきたい。

○ 部 会 長 ： 骨から指令が出ていると思いもしなかったというお話からは、“生きもの“それぞれが、どこでどのような関係を持っているかわからないが、邪魔だと思っている“生きもの”も、“生きもの”全体にとっては欠かせないものかもしれないということも含まれていると感じた。そういうことも含ませるには、「害獣対人間」、「かわいいペット対人間」など、限定したイメージを持たせないうまい表現や全体構成がないか、さらに工夫がいるのではないか。

○ 部 会 員 ： “生きもの“とただ言われると、アナグマやアライグマ、ハクビシンなど、農作物に害を与える害獣も思い浮かべてしまう。邪魔者にしてはいけないという気持ちはあるが、害獣も含めた“生きもの“という表現に工夫ができないか。

○オブザーバー： “生きもの”というと、害獣などのイメージを持たれる方も多いだろう。ただ、昔からいたイノシシは、事務局が発言されていた“バランス”が崩れて、非常に繁殖しているという実態がある。日々の暮らしの中から、“生きもの”を改めて考えるという観点をうまく出していくことも重要かと思う。
また、外来生物であるアライグマなどは異質なものとして、昔からいるイノシシなどの動物とは分けて考える必要があると思う。
「共生」という、なるべくいろんな“生きもの“がいる社会をつくっていくという方向性は、戦略の中で打ち立てていく必要があるように考える。

○ 部 会 長 ： 今のアドバイスから考えると、キャッチフレーズや将来像の中に、“バランス”や“適切な割合”などを表現できれば、「共に」という言葉を使用しても、先ほどのような疑問も出ないかもしれない。
もう一つ考えなければいけない外来生物のことだが、「生きものと共に」と表現したときに、異質なものとして扱う外来生物も“生きもの”に含まれる。そいった部分も初めから表現できたら、よりいいと思うが、とても難しい。

○ 部 会 員 ： 関係性を表すのであれば、“つながり”などの表現を用い、“つながり”という言葉の中に“バランス”の意味合いを持たせるのはどうか。どういった関係性やつながりがあるかを含んだ言葉であれば、受け入れやすい内容になるかなと思う。

○ 部 会 員 ： 先ほど、被害を及ぼす動物ということで意見を述べたが、例えばヒノキを植林すると、鹿がまっすぐ伸びていくヒノキの新芽を食べてしまったり、木の皮を食べてしまうことがある。ただ、ヒノキばかり植えることが正しいのかという問題が出てきている。森林を長い年月で考えると、花粉などの問題もあり、いわゆる雑木林のような自然の循環に基づいた森林の方が望ましいのではないか、ヒノキのような一つの木に頼るというのはおかしいというふうに反省されている。鹿がいることで、人間が経済性を優先したことに気づき、変わってきている。

また、外来生物についても、自分たちが今まで知らなかっただけで、他の地域では役に立っていることもあるかもしれない。

○オブザーバー： 特に地域戦略では、地域の“生きもの”、自然、環境の良さなど、地域の固有性を重要視する必要があるだろう。もともと、その地域にはいなかった外来の“生きもの”が入ると、その地域で成り立っていた自然、地域と人の暮らしも含めたものが崩れているということになろうかと思うので、外来種の問題は大きなひとつの課題かと考える。

また、戦略策定の目的は生物多様性の保全だけではないだろう。私たちの豊かな暮らし、持続可能な社会をつくるというのが究極の目標ではないか。そういう究極の目標を見据えて、“生きもの”をとらえる必要があり、害獣、外来種なども含めて、持続可能な社会、豊かな暮らしをつくっていくにはどうしたらいいかを考えていく必要があるだろう。そういう考えの中で、イノシシへの対応、外来種への対応など、答えが出てくると思うので、豊かな暮らし、持続可能な社会、そこを最終ゴールとして将来像を考えるという視点が重要かと思う。

○ 部 会 員 ： 例えば自然から頂く“恵み”という言葉を使うのは、日本的な表現だと思う。西洋的には、コントロールするというところがあるので、そういった語句の使い分けで、自然の恩恵をもらいつつも、外来生物などはコントロールしていくというイメージが入るといいかと思う。

○ 部 会 員 ： キャッチフレーズの中に、外来種のことまで盛り込むのは難しいようにも感じるので、外来種の項目は戦略本編の中で記載することとしてはどうか。

○ 部 会 員 ： 資料 2・2 ページでは、写真が 9 枚入るようになっているが、遺伝子の多様性の部分には、どのような写真を想定しているのか。

● 事 務 局 ： 古賀市内で撮影した写真を使用し、3 つの多様性を表現していきたいと考えている。

○ 部 会 長 ： この部分は、オブザーバーの支援もいただきながら、検討してもらいたい。

将来像やキャッチフレーズの件に戻るが、持続可能な社会や豊かな暮らしが究極の目標としてあること、恵みやコントロールという表現についてご意見があった。制御をしながらも共生していくということのなるのだろう。事務局案で

用いている “共生”という表現は、“双利共生”という意味合いかもしれないが、専門分野では、一方だけが得をする“片利共生”なども含めて、異なる生物が同じ場所で生きていることそのものを“共生”という使い方をする。

○オブザーバー： これまでは寒くて、大人になれなかったシカが、温暖化が進んで暖かくなったことで、成長できるようになり、増えたという話を聞いたことがあり、人間の活動と、害獣も含めた自然との関係は密接にあると感じた。そういう意味では、“共生”という表現もおかしくはないと思う。

○ 部 会 長 ： この戦略においても、“共生”という言葉を、害を及ぼすものも役に立つものも一緒に暮らしているという意味で使うこともできる。ただ、市民に分かりにくい、市民が受ける印象が良くないということであれば、考えなければならない。

● 事 務 局 ： 他の自治体の策定している戦略の将来像をいくつか紹介させていただく。

福岡県：生きものを支え　生きものに支えられる幸せを　共感できる社会

久留米市：自然とふれあい　自然の生きるまち　くるめ

豊岡市：穏やかに響き合う　いのちと地域

篠山市：未来につなごう「篠山の美しい自然と生きもの」

○オブザーバー： 将来像というのは、いわゆる“ゴール”だと思う。例えば久留米市は、目指す社会ということで、「自然とふれあい　自然の生きるまち　くるめ」があり、その下に「生きものの生息環境が守られたまちづくり」など、3つの目標（ターゲット）をつくっている。日本語では、ゴールもターゲットも、“目標”という言い方になるが、究極的に目指す姿である“将来像”、もう少し具体的な目標（ターゲット）の二本立てにするほうが、誤解がないと思う。

また、絵に書くとわかりやすいだろう。昔の姿となるかもしれないが、里山があり、雑木林や広葉樹の森があり、メダカなどが暮らす田んぼもあるなど、そこをめざすというような絵があると、非常にイメージしやすいと思う。

○ 部 会 長 ： 事務局としても、将来像の下に目標がいくつか並ぶという構成を考えていると思う。階層構造の枠を整理して、今日出たいろいろな意見がどの項目に盛りこまれるのか当てはめてみて、そのうえで、将来像やキャッチフレーズをどの程度のものにするのかという決め方のほうが、無理がないかもしれない。

予定していた10月の専門部会を待たずに、近々もう一度集まってもらい、他の自治体等の事例も参考にしながら、大枠をつくってはどうか。

● 事 務 局 ： ご提案のとおり、先にターゲットの部分を詰めて、それから、ゴールに戻るという進め方とさせていただきたい。

○ 部 会 員 ： 「自然から恵みをいただく」という表現はすごくいいと思う。“生きもの“にこだわらず、「自然から恵みをいただく」、「人と自然がともに生きる」などの表現であれば、共生ということに違和感がないのではいか。

○オブザーバー： 福岡県の将来像「生きものを支え　生きものに支えられる幸せを　共感できる社会」というのは、“幸せ“をイメージするようなものになっており、SDGsのめざす「豊かな幸せな社会をつくる」にも通じる。そう考えれば、必ずしも“生きもの”という言葉は入れなくてもよいが、私個人としては入れた方がいいように感じる。

○ 部 会 長 ： 次回の専門部会は10月となっているが、本日委員の承認を得て、10月より前に開催してはどうか。1ヶ月程度あれば、大枠の案ができるのではないか。

● 事 務 局 ： 第 2 回と第 3 回の専門部会で、施策についての検討していただく予定だったが、第2回の専門部会を前倒しし、施策については第3回で協議していただくようなスケジュールとさせていただきたい。第2回専門部会は8月頃の開催ではどうか。

○ 部 会 長 ： それでは、8月までにもう少し後半の部分まで案をつくり、全体がわかるようにしておいて、改めてこのフレーズについて協議していくこととする。

○ 部 会 員 ： 事務局案の候補②の「人と生きものが　共に育つまち」というのは、最終目標ではないかもしれないが、流動しながら育っていく、ずっと続いていくんだというイメージを非常に表していると思う。どう変わるかわからないけれども、育ち方をやめないという意味でも、とてもいいと思う。

○ 部 会 長 ： “育つ”という表現は、高校生のワークショップで出た意見で、とても素晴らしかったので、候補に挙がっている。

○ 部 会 員 ： 資料2・3ページだが、昨年度の生物調査検討委員会でも、大根川がさみしいという意見が出ていた。現在工事をしている上屋敷の親水公園にはなまずがおり、清滝川ランプの付近にはホタルがいるため、2カ所を追加してはどうか。

○ 部 会 長 ： この箇所について、生物調査検討委員会後に、何らかの修正が行われたか。

● 事 務 局 ： 資料2・3ページについて、ご意見をいただいていた、上米多比部分は円を広くしており、河川がわかりやすいように地図も変更している。また、希少種の写真の掲載は控えた方がいいとのことだったので、以前の資料で掲載していた希少種の写真はできるだけ削除し、河川の“生きもの“等も掲載していない。先ほどのご意見いただいたとおり、事務局案を作成し、次回ご審議いただきたい。

○ 部 会 員 ： 上米多比は、資料に記載されているような、ホタルが「神秘的に飛び交う」ような状況にない。どちらかといえば、清滝川のほうが、記載されている状況には近いだろう。上米多比には両生類が生息している重要な場所ではある。

● 事 務 局 ： 資料2・8ページに、“2024年”とあるが、“2033年”の誤りなので、資料の修正をお願いしたい。

○ 部 会 員 ： 資料2・3ページに、“若宮町”とあるが、“宮若市”ではないか。

● 事 務 局 ： “宮若市”に修正させていただく。

○オブザーバー： 将来像の話に戻るが、事務局が提案された3つの候補はよく考えられてると思う。文言だけなく、それぞれの解説のところなども、「豊かな自然もありながら」、「持続可能なイメージ」など、そういったという言葉も使われていて、非常にいいと思う。

「ともに育つ」という表現がいいとのご意見も出ていたが、福岡県でも「幸せを共感できる社会」の目標の一つとして、「私たちの暮らしの中で生物多様性を育みます」と、“育む”という言葉を使っている。

また、“つながり”という言葉が候補③にも使われているが、“つながり”も非常に重要で、なるほどという言葉だと感じた。

前年度の生物調査検討委員会において、候補①の提案があったかと思うが、ど

ういう経緯で候補②・③ができたのか、

● 事 務 局 ： 候補①の「環のまち　古賀」は、第２次古賀市環境基本計画の将来像と合わせている昨年度の生物調査委員会で、環境基本計画の環境像も、戦略の将来像には合うのではないかということで、お話しをさせていただいた。環境基本計画の文言とは少し変わっているが、共生の「環」、共働の「環」、循環の「環」が広がるようなイメージで、「環のまち　古賀」という表現をしている。

高校生のワークショップで、豊かな自然は守っていかなければならない一方で、私たち人間も、街としても、活気を持ちながら、発展をしていかないといけないという意見が出ていた。そういう意見も踏まえて、生物多様性をきちんと保全しながら、経済活動も含めて持続可能な社会をめざす、街を発展させていくっていうイメージを持った将来像として、候補②として挙げさせていただいた。

候補③については、自然の中での“生きもの“のつながりだけじゃなく、“生きもの“と人、人と人などのつながりがあり、その”つながり“はこの戦略においても重要なもので、そういった”つながり“によって、生物多様性が豊かになり、持続可能な社会へもつながるのではないかというイメージを持った将来像として挙げさせていただいた。

○オブザーバー： うまく３つを合わせたような将来像ができればいいのではないかと思う。

○ 部 会 長 ： 今のアドバイスも参考にして、将来像の下のターゲット等をもう少し具体的にして、本日のご意見をどの部分に記載していけるか、大枠を作成した段階で、８月の専門部会で再度検討していくこととしたい。

● 事 務 局 ： 第２回の専門部会は８月下旬ごろとさせていただきたい。詳しい日程については、改めて調整させていただく。

６．その他

（１）生物多様性専門部会の公開について

・前年度の生物調査検討委員会では、希少種の生息場所を広く公表しない方がいいのではないかとの意見が出ていたが、古賀市では、情報公開という視点から、会議を一広く般に公開することとなっている。会長からもアドバイスをいただき、非公開とする理由があれば、会議を非公開にすることも可能であることから、専門部会の協議中に希少種の生息場所や環境などが外部に知られてしまう可能性があるという理由で、会議を非公開とする手続をとりたいと考えていることを事務局より説明し、出席委員より承認いただいた。

７．閉会